

キャンパスの

設備・環境案内



臨場感あふれるファイナンスの授業を
提供するために——
サイバー・トレーディング・ルーム

「サイバー・トレーディング・ルーム」は日本橋キャンパスの入り口に位置している。外からでもカラフルなプラズマの大画面が見えるので、このキャンパスを訪れるひとの目を引く存在である。まるで金融機関のトレーディング・ルームのようなガラス張りの部屋のなかには、インストラクター席を取り巻くように12個のデスクが配置され、1台のCPUに対して2台のモニターを接続した贅沢な構成である。金融市場で働く人たちは、情報が命であり、たくさんのスクリーンを同時に開いて、マーケットの動きに目を光らせている—こんな光景が目に見えよう。

現在、設置されている情報サービスは、リアルタイムでマーケットの動きを伝えるQUICK-ActiveManagerと豊富なデータベースを提供するAMSUS、ポートフォリオ・マネージメントに求められる機能とデータを満載した「日経ポートフォリオ・マスター」、投資信託や年金運用のスタイル分析を提供する「MPIスタイル」、流体力学の考え方を応用して株式市場の挙動を分析するCMDリサーチの「MUST」がある。こうしたシステムは、「ファイナンスのためのデータ解析」や「不動産金融工学」「信用リスクモデリング」などの授業でさっそく利用されている。テキストで学んだことを実務で使われている本格的な情報システムですぐに確認できるのが強みである。

さらに、大学院ファイナンス研究科では、仮想市場における意思決定の演習に力をいれており、イェール大学で開発された「実験ファイナンス」用の「CapLab」と呼ばれるシステムや株式の模擬売買ができるシミュレーション・インスティテュートの「LIVE」も入っている。マーケットにおける意思決定は、机上で考えたようにはなかなかいかないもの。こうした仮想市場を活用して、臨場感あふれるファイナンスの授業を提供するのに、欠かせない存在である。

もうひとつ、サイバー・トレーディング・ルームには、ここにしかないアプリケーション(ソフトウェア)がある。50インチの大画面に表示される3つの大きな球体である。これは東京証券取引所の売買状況を描画するアプリケーションである。緑色の球体は、業種別の株価動向、レッドの球体は個別銘柄の株価と変化、ブルーの球体は個別銘柄や指数の動きをチャートでみたものである。取引所のフロアでの取引状況が目で見られた10年前と違って、日本の株式市場はすべてコンピュータのなかで引越してしまっただけで、ビジュアルにマーケットの動向を伝えるツールを作りたいという思いを、QUICK社とCMDリサーチの技術者が工夫を凝らして試作してくれたものである。今後「サイバー・トレーディング・ルーム」は、新しい金融市場の分析手法を生み出す「サイバー・金融工房」としてさまざまな試みを発信する基地になることを期待している。

ファイナンス研究科教授
宇野 淳

